

氏名	森本 真太郎 (学籍番号 16DR06)		
学位の種類	博士 (リハビリテーション科学)		
学位記番号	29号		
学位授与年月日	2020年3月12日		
論文題目	利用者からみた高齢者デイサービスを利用することの意味 -A デイサービスでの調査を通して-		
論文審査担当者	委員長	柴本 勇	教授
	委員	川村 佐和子	教授
	委員	矢倉 千昭	教授
	委員	新宮 尚人	教授
	委員	田島 明子	教授

論文要旨

I. はじめに：要介護状態でも在宅生活を送るための介護サービスにデイサービス（以下、デイ）がある。しかし身体機能に偏ったサービス内容や、個々の思いが把握できないことが問題視されていた。またデイに対し否定的感情をもつ者がいることがわかった。こうした現状より、今後のデイは活動・参加の要素にも働きかけ QOL 向上と意欲を引き出す働きかけが必要とされていた。そこで、本研究で対象とした A デイサービス（以下、A デイ）で調査を実施した。

II. 研究目的と意義：本研究の目的は、A デイにおける活動内容と利用者の思いの相互作用に着目し、利用者の A デイ利用の意味を明らかにすることである。本研究の意義は、活動内容と利用者の思いを統合的に検討し生活や人生の文脈に即したデイ利用の意味を捉えることで、意欲や QOL 向上に資するデイの在り方を考察できると考えた。

III-1. 対象者の基本情報の収集

【方法】対象者 50 名の基本情報をカルテから閲覧・転記した。また活動能力指標を用いて調査した。

【結果】

1. 対象者の基本情報：対象者の要介護度は軽度から中等度、障害高齢者の日常生活自立度が比較的高かった。また A デイの利用期間は約 2 年から 3 年で長期にわたる者が多かった。

2. 活動能力指標：対象者は社会参加が乏しく、一人で外出困難な者が多かった。

III-2. 研究 1：利用者の活動内容の選好と生活全般に対する思いに関する調査

【目的】A デイ利用者の活動内容の選好と A デイを含めた生活全般の思いに関する全体的な特徴を明らかにすることを目的に質問紙調査を実施した。

【方法】

1. 活動内容の選好に関するデータ収集内容

A デイにおける活動の選好を知るため、毎回行う活動及び好きな活動に関する質問紙調査を行った。

2. A デイを含めた生活全般の思いに関するデータ収集内容と分析

【方法】A デイの重要性や満足度、及びそれらに関連すると考えられた生活満足感等を明らかにするために Visual Analogue Scale（以下、VAS）による調査を実施した。次に、研究2の対象者選定のため、VAS 値の主成分分析と主成分得点を変数としたクラスター分析にて対象者50名をグループに分類した。

【結果】活動内容の選好の傾向は、リラクゼーション活動が多く、次いで「下肢機能」等の身体的なエクササイズが多かった。VAS 値の傾向は、A デイに肯定的な思いを抱いているが、非利用日や自身の健康と生活には満足していなかった。VAS 値を利用した主成分分析は、寄与率が高かった第1・第2主成分に着目した。第1主成分は「デイは人的交流が豊かでプログラムや設備も良く楽しい」と命名し、第2主成分は、「健康で日常生活に満足しているが、デイは経済的負担感があり満足していない」と命名した。次のクラスター分析では、50名の対象者の特性が4つのグループに分類された。

Ⅲ-3. 研究2：利用中の活動参加状況の観察と個別インタビュー調査

【目的】研究1で明らかになった結果の特徴を代表すると考えられた利用者9名に対し、利用中の観察と個別インタビューを通して、活動内容とその意味を把握することを目的とした。

【方法】

1. 対象者：クラスター分析で分類された4つのグループから各2~3名、合計9名とした。

2. 参加状況の観察のデータ収集方法と内容

1人につき約3時間（1回利用時）の間に行なった活動内容の順序、種類、時間を観察し記録した。

3. 個別インタビューのデータ収集方法及び分析

活動内容の選好及びVAS 値がA デイを利用する意味にどのように関係するかに着目し個別インタビューにて聴取した。インタビュー内容はKJ法の手法に従い分析した。

【結果】KJ法のまとめより、「利用動機」と「利用に対する思い」にまとめることができた。対象者の多くは、負の思いを伴った利用動機となっていた。一方、A デイに対する思いは、機器が豊富に整備され自由に使えることに満足していた。また、職員との立場が対等と感じ、緩やかな雰囲気の中で自然な交流が生まれ、居心地の良い時間を過ごしていることが明らかになった。

IV. 考察

1. デイ利用の意味と利用動機の関連性

対象者は、家族に対する負目などの負の思いが利用動機となっていたが、それらがデイ利用によって負の思いを反転させるような肯定的な意味に変換していたと考えられる。

2. デイ利用の意味と4つの活動との関連性

負の思いが伴う利用動機が、A デイにおける「他者との交流」「外出の機会としてのデイ」「身体機能を維持回復させる活動」「リラクゼーションを得る活動」に結びつきA デイが居場所になり、また、活動内容を自己調整できることで肯定的な意味の生成につながったと考える。作業療法では、意味のある活動は、人・環境・作業の相互作用によって成立するとされる。A デイでは利用動機と活動内容が結びつき、人との交流や身体に無理のない活動ができ、意味のある活動が可能になったと考えられる。

3. デイ利用の意味と自己決定の機会の関連性

自己決定による活動機会と、職員の見守りによる安心感によって、多様で肯定的な意味が持てると同時に、自己効力感や主観的幸福感にも影響を与えたと考えられる。

V. まとめ：本研究の結果、利用動機がデイ利用の意味の背景要因と重要な位置にあり、なおかつデイ利用の意味を見いだすための活動があった。また、主体性の尊重や自己決定の機会の提供が肯定的な利用の意味につながっていた。以上より、今後のデイは、利用者が安心感や居場所と感じられる相互交流のなかで、利用動機や自己決定に即した肯定的な意味を持てるような活動機会の提供により、意欲と QOL 維持向上に資するデイにつなげることが必要と考えられた。

VI. 本研究の限界と今後の展望：本研究の対象は一施設、個別調査の対象者が少人数のため本研究の成果の一般化には限界がある。今後は事例数を増やし本研究で得られた仮説の精度を向上させたい。

論文審査の結果の要旨

論文審査であるが、新規性、目的・結果・考察の一貫性の不足についての審査委員会からのご指摘を踏まえ、修正を行った論文の審査がなされた。審査委員会からは、短期間のうちに適切な修正が行われ、論旨や目的、新規性がわかりやすく提示されている点において、審査対象者である森本真太郎の努力と本分野における見識の高さが評価された。

本研究は、利用者が高齢者デイサービスを利用することの意味を、作業療法科学の視点を用いて活動内容と意思の相互作用から捉え、量的データと質的データの緻密な分析を行った結果より、利用者にとって意欲やQOL向上に資するデイサービスの在り方について新規性のある考察を行っており、審査委員会一致により、博士（リハビリテーション科学）の学位に値する価値のある論文であることが認められた。